

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：37126

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10415

研究課題名（和文）医療依存度の高い障がい児と家族への訪問看護師スキルアップ研修プログラム作成

研究課題名（英文）Creation of a training program to improve the skills of Visiting Nurses in Supporting Medically Dependent Children and their families

研究代表者

渡辺 まゆみ（WATANABE, Mayumi）

福岡女学院看護大学・看護学部・講師

研究者番号：00728743

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：初年度は、子どもに対する訪問看護師の実態調査として文献検討を訪問看護師側と家族側の訪問看護に対する考えをまとめた。その結果より、訪問看護師5名と家族（母親）4名にインタビュー調査を行い、それぞれがどのように訪問看護師の関わりを認識しているかを明らかにした。これらの研究から、研修プログラム作成に向けて、訪問看護師の役割を、役割遂行に必要とされている3つ（構造的役割・対人役割・役割過程）に分け、それぞれの役割のどの部分が現在遂行され、どの部分が役割を担っていないかを明らかにした。結果、看護師としての成長を認め、内省する教育の必要性が示唆された。2023年度に研修プログラムを実装予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果は、医療依存度の高い子どもへの訪問看護師の役割の実態が明らかになったことである。子どもには成長発達を踏まえて関わり、家族へは家族個々や家族全体への調整を行っていた。しかし、訪問看護のシステムの理解が経験年数で違っていたことや自己の成長や訪問看護師としての将来像に関する認識が低かった。訪問看護師は子どもと家族の生活する場所に1人で看護に行く場合が多く、自己の看護の振り返りや看護師としての成長を認める機会が少なかったと考えた。今後は、訪問看護師としての知識や技術の育成と自己の看護を内省する機会を設け、訪問看護師としての継続する意義を見いだすようなプログラムの実施が必要である。

研究成果の概要（英文）：In the first year, a literature review was conducted as a survey of the actual situation of home health care nurses toward children. As a result, differences in ideas about home health care nursing on the part of home health care nurses and on the part of family members were clarified. From this literature review, interviews were conducted with five visiting nurses and four family members (mothers).

Based on these studies, the roles of the visiting nurses were identified for the creation of a training program. Based on the results of the interviews, the roles were divided into three categories (structural role, interpersonal role, and role determination process) that are needed to fulfill the role, and which parts of each role are currently being fulfilled and which parts are not. The results suggest the need for education that acknowledges and encourages reflection on one's growth as a nurse; a training program will be implemented in 2023.

研究分野：小児看護学

キーワード：訪問看護師 医療依存度の高い子ども 医療依存度の高い子どもを持つ家族 訪問看護師の役割

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

医療的ケアの必要な子ども(以下障がい児)へ在宅での支援を行える訪問看護ステーションは、全体の5割程度しかない。しかし、医療の高度化による在宅で生活する障がい児が増加し、訪問看護師の役割が大きくなっている。これまで、障がい児と在宅で生活することは、家族にとって生活のリズムの変化や家族内の役割の変化などがあり、葛藤を持ち生活していることが明らかになり、訪問看護師など他者の支援の必要性が不可欠になった。本研究では、これらの成果をさらに発展させ、地域で活躍している訪問看護師や他職種の障がい児への支援の現状と小児訪問看護師の育成の方法を明らかにする。また、家族のニーズを調査し、本当に家族が望む在宅への支援の内容を明らかにする。さらに、小規模訪問看護ステーションでも参加することで、家族のニーズを踏まえた研修プログラムの作成を行う。障がい児と家族がよりよい生活ができる地域づくりにつながるように、小児訪問看護師の増加と家族のニーズを満たすことができる支援に発展させたい。

### 2. 研究の目的

小規模訪問看護ステーションが5割以上の地域における在宅で生活している障がい児と家族へ関わっている訪問看護師の実態と、他職種(保健師・病院の看護師・特別支援学校の先生・保育士・訪問リハビリなど)との連携の状況を明らかにする。さらに、家族のニーズと訪問看護師の看護の実態を明らかにし、障がい児と家族が地域で生活できるような研修プログラムを作成することを目的とした。

### 3. 研究の方法

2.の目的を遂行するために3段階の研究を行った。

#### 1) 文献検討

訪問看護師と家族が訪問看護をどのように捉えているかを文献検討し、今後の支援上の課題を考察することを目的に取り組んだ。(1)看護師が捉えた訪問看護、(2)家族が捉えた訪問看護の2つの視点で分類し、(1)28件(2)31件の計59件を検討した。

#### 2) インタビュー調査

インタビュー調査では、訪問看護師5名と訪問看護を行っている家族(母親)4名に半構成的面接法によるインタビューを行い、訪問看護の実態を訪問看護師と家族のそれぞれの認識から、訪問看護の実態を明らかにした。

#### 3) 訪問看護師の役割に関する研究

2)のインタビュー調査で抽出された内容から、役割遂行に必要とされている3つ(構造的役割・対人役割・役割過程)に分け、それぞれの役割のどの部分が現在遂行され、どの部分が役割を担っていないかを一般化構造方程式モデルを用い検討した。また、調査時現在、どの職種とどのように連携しているかの実態調査も行った。

調査方法は、西日本の訪問看護ステーションの責任者へ研究協力依頼を文書にて行った。研究協力の承諾時は同封した承諾書に返信していただき、研究対象者数を記入していただいた。返信された承諾書を確認後、無記名自記式質問紙の必要部数を訪問看護ステーションに郵送し、責任者より研究対象者に配付してもらった。

### 4. 研究成果

#### 1) 文献検討

59件中、量的研究が12件、質的研究が38件、その他(事例等)が9件だった。看護師の捉えた訪問看護の内容は、7カテゴリー、21サブカテゴリーに分類された。家族が捉えた訪問看護は、8カテゴリー、23サブカテゴリーに分類された看護師と家族が捉えた訪問看護は、障がい児の医療的ケアや成長発達の支援、家族内の調整や家族の個々への支援など同じ方向性で支援を行っていた。また、家族は、看護師の支援を受けることで、家族内の調整、障がい児と一緒に生活する意味を見出していた。しかし、家族は、生活を継続中にジレンマを生じ、考えや思いの変化もあり、障がい児の成長過程での支援、ピアグループとの関わり、システムの整備への要望など長期的な視点で支援を望んでいた。このことから、家族は障がい児と家族個々への支援と障がい児と家族のライフステージに即した支援など、在宅生活を継続して行うことができるような支援の必要性が示唆された。

#### 2) インタビュー調査

##### (1) 訪問看護師

研究参加者は、小児の訪問看護歴2年～12年（病院の看護師歴7年～18年）30代～50代の5名の看護師であった。看護師の関わりを5つに分類し、38カテゴリー、95サブカテゴリーが抽出された。看護師は訪問看護師としての看護観を持ち障がい児と家族に看護を行っていた。看護を行う上で、看護観に影響する肯定的な要因と葛藤を持ちながら看護を行い、障がい児に対して、家族に対してそれぞれをケアの対象者と捉え関わっていた。さらに、障がい児と家族が在宅療養生活を継続できるように家族とパートナーシップを形成し、家族が障がい児と生活する意味を見出せ、家族が中心となり力を発揮できるように関わっていた。

## (2) 家族

研究参加者は、訪問看護を利用して1年～10年の40～50代の母親4名であった。母親が認識した訪問看護より26カテゴリー、60サブカテゴリーが抽出された。母親は、療養生活の場である自宅に他者を入れたくないなど葛藤を抱いていたが、訪問看護を受ける体験や看護師との関わりにより嬉しさや喜びを新たに感じていた。母親は訪問看護を利用したことで、家族で生活を継続する力を得ることができ、家族個々の生活の充実につながったと認識している。

## 3) 訪問看護師の役割に関する研究

### (1) 役割に関する研究

西日本地方の全訪問看護ステーション4527カ所の責任者へ研究協力依頼を文書にて行った。研究協力の承諾時は同封した承諾書を返信していただき、149カ所に承諾をいただいた。返信された承諾書に書かれていた515部のアンケートを郵送した。299名（回答率58.0%）返信があり、有効回答が得られた296名（有効回答率57.0%）を研究対象とした。調査期間は2019年12月～2020年3月31日とした。

各役割の構成要素を明らかにし、さらに構造的役割、対人役割、役割過程の3つの役割の構成を明らかにするために、潜在変数に対する観測変数の平均値を算出し、各役割の潜在変数の影響を分析した。

その結果、「対人役割」の構成要素は＜子どもへの関わり（パス係数0.87）＞＜家族員への関わり（パス係数0.92）＞＜家族全体の調整（パス係数0.90）＞＜連携（パス係数0.77）＞であった。「構造的役割」の構成要素は＜訪問看護の体制（パス係数0.71）＞＜訪問看護師の技術（パス係数0.85）＞であった。「役割過程」の構成要素は＜成長する内容（パス係数0.70）＞＜将来の在り方（パス係数0.55）＞であった。役割間の相関は、「対人役割」と「構造的役割」は0.88と強い正の相関が示されたが、「対人役割」と「役割過程」は0.28、「構造的役割」と「役割過程」は0.14とそれぞれ弱い正の相関が示された（Figure 1）。結果より、看護師としての成長を認め、内省する教育の必要性が示唆された。

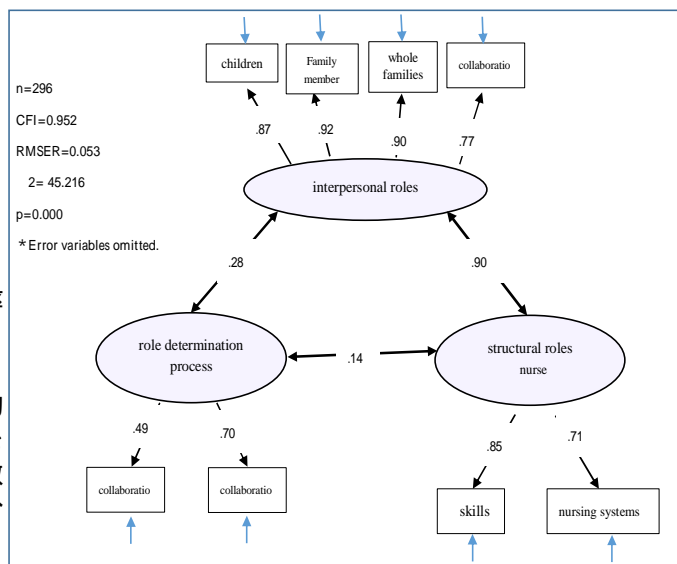


Figure 1. Relationships among structural roles, interpersonal roles, and the role determination process

### (2) 連携の実際

(1)の研究対象者に対し、どのような職種とどのように連携をとっているかの実態を調査した。その結果、情報共有の職種は、医師290名(98%)、相談支援員252名(86%)、理学療法士・作業療法士・言語聴覚療法士252名(86%)、学校117名(40%)、市町村175名(60%)、他の訪問看護ステーション215名(74%)であった。また、職種別の共有方法として、医師；カンファレンス150名(50.7%)、紙面176名(59.5%)、メール70名(23.6%)、電話218名(73.6%)、FAX120名(40.5%)であった。相談支援員；カンファレンス193名(65.2%)、紙面111名(37.5%)、メール35名(11.8%)、電話206名(69.6%)、FAX84名(28.4%)であった。理学療法士など；カンファレンス164名(55.4%)、紙面59名(19.9%)、メール29名(9.8%)、電話102名(34.5%)、FAX27名(9.1%)であった。看護師の連携の方法は様々であり、多職種が集合し話し合えるカンファレンスや相互にやり取りできる電話が主流であった。今後は、コロナ後における医療の変化の現状も踏まえつつ、セキュリティを高めながら、ICTの活用なども求められていると考える。

## 4) 研究成果の実装

2023年度COVID-19が5類移行になり、訪問看護師の研修会の参加も見込めることから、知識と技術の拡充、看護のリフレクションを踏まえた訪問看護師の研修を計画 중이다。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Mayumi Watanabe, Kazuki Masumori, Tatsuyuki Kakuma	4. 巻 69
2. 論文標題 Roles of Visiting Nurses in Supporting Medically Dependent Children Living at Home	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The Kurume Medical Journal	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡辺まゆみ, 益守かつき
2. 発表標題 医療依存度の高い子どもと家族への訪問看護の連携の実態
3. 学会等名 第67回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡辺まゆみ, 益守かつき
2. 発表標題 医療依存度の高い子どもと家族への訪問看護の実態調査
3. 学会等名 小児看護学会第29回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺まゆみ, 益守かつき
2. 発表標題 医療依存度の高い子どもの母親が認識する訪問看護の実態
3. 学会等名 日本家族看護学会第26回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺まゆみ、益守かづき
2. 発表標題 医療的ケアの必要な子どもへの訪問看護に関する文献検討
3. 学会等名 小児看護学会第28回学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	益守 かづき  (MASUMORI Kazuki)	久留米大学・医学部・教授	
	(20238918)	(37104)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------